2010年度APPE大会参加報告

山本 圭一郎

アメリカ合衆国には実践倫理・職業倫理学会（Association for Practical and Professional Ethics）という団体がある（以下APPEと略する[1]。この学会は、実践倫理・職業倫理教育および学際的な研究を活性化させるという目的をもって、主にインディアナ大学が中心となって1991年に設立された。当学会設立の背景のひとつに、これまで米国において政治家をはじめとしたさまざまな分野の専門家や組織人たちの倫理に反する振る舞いが世間の注目を浴びるようになり、これに連動して、公衆、ビジネスに携わる人々、非営利団体、政策立案者、学者、専門家たちの間で実践倫理および職業倫理に関する交流や対話を促す必要性が説かれるようになったことが挙げられる。こうした背景のもと、大学などの教育機関の多くは、これまで以上に専門家や市民に対する道徳教育に力を入れると同時に、実践倫理および職業倫理について人々の交流や学際的な対話を促進しようと努めるようになった。この大きな試みを促し支援する団体のひとつが、APPEである。

報告者は、京都大学大学院文学研究科倫理学研究室の水谷雅彦教授のご紹介とお力添えでAPPE大会に参加できることになった。報告者が参加した2010

[1] Association for Practical and Professional Ethicsのより詳細な情報は次のウェブサイトを参照のこと（2010年12月31日最終アクセス）。http://www.indiana.edu/~appe/index.html

年度のAPPE本大会は3月4日から7日までの4日間の日程で、アメリカ合衆国オハイオ州シンシナティで開催された。報告者はその大会に参加するため、シカゴ経由でケンタッキー州にあるシンシナティ・ノーザンケンタッキー国際空港に下り立ち、シャトルバスでオハイオ川に架かる鉄橋を渡ってシンシナティの中心街に向かった。南北戦争の時代には、このオハイオ川が奴隷制廃止を訴えていた北部と奴隷制を維持し拡大しようとした南部の境界線のひとつであったこと、奴隷の身であった人々が南部のケンタッキーから自由州のオハイオに逃げ込むために身の危険を顧みずこの川を渡っていたこと、その脱出を手助けするための地下組織であったアンダーグランド・レイルロード（Underground Railroad）がシンシナティを拠点にしていたことなどを思い出しながら、また、シャトルバスの運転手がトヨタのリコール問題の話題を振ってきたのでそれに応じながら、学会の会場でもあるホテルに着いたのはもう日も暮れかけた頃だった（どこで読んだのか忘れてしまったが、アメリカ合衆国初の本格的な地下鉄がニューヨークで開通したとき、ロンドンで地下鉄を指すUndergroundという言葉を用いてしまうとこの地下組織と混同される恐れがあったため、代わりにSubwayという言葉を用いるようにしたらしい）。

さて、報告者が参加したAPPE大会はシンシナティの中心街にある大きなホテルの数フロアを貸し切って行われた。そこでは各参加大学の学生たちがチームを作って、一連の倫理問題（たとえばテストでのカンニング、友情、銃規制や討論の自由などに関わる問題）に対し自分たちの根拠を提示しつつ答えるトーナメント（Intercollegiate Ethics Bowl）をはじめとして、個人研究発表、大学

院生のための倫理教育セミナー、ミニ・カンファレンス、ワークショップ、エシックスセンター会議（Ethics Center Colloquium）などさまざまな催しが目白押しであった。報告者が主に参加できたのは、本大会が始まる前日の3日から開催されたプリカンファレンス・ワークショップ、エシックスセンター会議、そして、いくつかの個人研究発表である。以下では、最初に、プリカンファレンス・ワークショップのおおまかな様子を簡潔に報告し、次に、エシックスセンター会議の内容について報告することにしよう。

プリカンファレンス・ワークショップはAPPE本大会前日の3日から2日間にわたって開催された。このワークショップはノート型コンピュータや携帯電話やスマートフォンといった持ち運び可能な小型情報通信機器の研究と応用に関する倫理指針（Ethical Guidance for Research and Application of Pervasive and Autonomous Information Technology）について話し合うことを目的としたもので、省略してPAITと呼ばれている（以下ではPAITと略する）[2]。PAITの参加人数はわたしも含め36名であったが、APPEの学際的な研究を促すという目的に沿って、その参加者たちの面々はコンピュータ科学者、法学者、地理学者、倫理学者など実に多様であった[3]。たとえば、PAITに参加していた倫理学者は、かつて「情報倫理の構築」プロジェクト（FINE）において水谷雅彦教授と共同研究を行ったニューヨーク大学のヘレン・ニッセンバウム教授やヴァージニア大

[2] PAITのより詳しい情報については次のウェブサイトを参照のこと（2010年12月31日最終アクセス）。http://poynter.indiana.edu/pait/index.shtml

[3] 2010年度APPEに合わせて開催されたPAIT参加者のリストは次のウェブサイトに掲載されている（2010年12月31日最終アクセス）。http://poynter.indiana.edu/pait/overview.shtml

学のデボラ・ジョンソン教授などである[4]。

初日のPAITは朝8時から夕方5時までの時間帯で行われた。まず、H・ニッセンバウム教授による発表（“A PAIT Case Study: Online Behavioral Advertising & Contextual Integrity”）があり、この発表の内容について討論を行った。次に、Katie Shilton “Mobile Phones and Pervasive Data Collection”、Keith W. Miller “The Problem of Many Hands When Some of the Hands are Robotic: Nissenbaum 1994 Revisited”、Ken Pimple “Principles for the Ethical Guidance of PAIT”、これら三つの議題について三つのグループに分かれて討論した後、この討論の内容について各グループが報告し全体で再び議論を交わした。報告者はPAITの責任者でもあるインディアナ大学のK・ピンプル教授のグループに参加し学際的な討論に加わったが、哲学者・倫理学者たちの視点とコンピュータ科学者をはじめとした他分野の人々の視点が食い違う場面もいくつか見られた。たとえば、コンピュータ科学者と倫理学者の意見が衝突したとき、両者が熱くなる場面もあった。もっとも、最後は話し合いを経て折り合いがついたのだが、おそらくそのコンピュータ科学者は哲学・倫理学的な議論をもどかしく感じたのであろう。報告者には、PAITは哲学や倫理学を専門とする人とそうでない人のある種の異文化交流のようにも見えた。この点で、PAITは学際的な取り組みを成功させるための試行錯誤のひとつであったと言えるだろうし、実際、この取り組みを行う際の課題についても議論となったのでたいへん有意義であった。二日目の

[4] 「情報倫理の構築」プロジェクト（FINE）については次のウェブサイトを参照のこと（2010年12月31日最終アクセス）。http://www.fine.bun.kyoto-u.ac.jp/

PAIT では二つの発表と三つのパネル・ディスカッションが行われた。報告者は午前中に行われた発表とパネル・ディスカッションにだけ参加し、午後はエシックスセンター会議に参加するため、お世話になったピンプル教授に挨拶してPAIT 会場を後にした。

冒頭で触れたように、大学をはじめとしたアメリカ合衆国の教育機関では、実践倫理および職業倫理について人々の交流や学際的な対話を促す試みが行われている。このため、アメリカ合衆国の主要な大学には必ずといってよいほどエシックスセンターがある[5]。そして、APPE は 150 以上のエシックスセンターやそれに準ずる研究所を抱えている大きな団体であり、その本大会プログラムの目玉のひとつがエシックスセンター会議である[6]。この会議は、各エシックスセンター長があるトピックについてそれぞれの運営体験にもとづいて発表を行い、課題や解決策などを参加者全員で討論するという形をとっている。2010 年度のトピックは「不況下のアウトリーチ・コンサルテーション・存続（Outreach, Consultation and Survival in Economic Hard Times）」であった。発表者は、ロヨラ大学シカゴの前エシックスセンター長 David T. Ozar 哲学教授、デューク大学のキーナン・エシックス研究所（the Kenan Institute for Ethics）所長の Noah Pickus 氏、ノースカロライナ大学チャペルヒル校のパー・エシックスセンター（the Parr Center for Ethics）長の Jan Boxill 氏、サザンカリフォルニア大学のリーヴァン人

[5] 日本で言えば、北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センターがアメリカ合衆国の大学のエシックスセンターに近いと言えるだろう。当センターについては次のウェブサイトを参照のこと（2010 年 12 月 31 日最終アクセス）。http://ethics.let.hokudai.ac.jp/ja/center.html

[6] APPE のエシックスセンター会議に関する情報については次のウェブサイトも参照のこと（2010 年 12 月 31 日最終アクセス）。http://www.indiana.edu/~appe/ethicscenters.html

文・倫理研究所（Levan Institute for Humanities and Ethics）所長の Lyn Boyd-Judson 氏および当研究所のリサーチアソシエイトの Shlomo Shern 氏であった（発表順）。これらの発表は若干の資料やコンピュータを使ったプレゼンテーションもあったものの基本的には口頭であったので、報告者のノートが頼りではあるが、以下では各発表のおおまかな内容をまとめることにしよう（ただし、エシックスセンター会議の発表内容は次年度の APPE 大会までに会議モノグラフ（Colloquium Monographs）という形で活字にされることになっている[7]）。

2010 年度のエシックスセンター会議は、ロヨラ大学シカゴの前エシックスセンター長 David T. Ozar 哲学教授の発表（"Thirteen Years of Lessons about Creating Ethics Center Revenue by Selling Ethics Education and Consulting Services"）から始まった。その内容を一言でまとめるならば、エシックスセンターの運営に関して発表者の長年の経験から得られた教訓を述べるということになるだろう。まず、発表者は哲学者である自分がエシックスセンターを運営することになったときの戸惑いと、その運営のために財政を学ぶことに時間がかかったことについて語った。次に、この点に関連して発表者が取り上げたのはエシックスセンターの運営費をいかにして確保するかという問題であった。この問題について発表者は、大学のエシックスセンターの運営費を確保するために大学の予算編成に関する知識が必要なこと、大学が配分する予算だけではエシックスセンタ

[7] 報告者はこれまでの会議モノグラフを購入して帰国したので、機会があればそれらについても報告したいと考えている。なお、2010 年度エシックスセンター会議の概要は次のウェブサイトに掲載されているので、そちらも参照されたい（2010 年 12 月 31 日最終アクセス）。http://www.indiana.edu/~appe/ethicscenters.html

ーを運営することが困難な場合があること、その場合には、エシックスセンターはそれが属している大学をはじめとして、他の教育機関や一般企業などに対して倫理教育や倫理コンサルテーションを提供すること（アウトリーチ・サービス）で収益を上げる必要があることなどについて話した。最後の点について言えば、エシックスセンターが倫理教育や倫理コンサルテーションから利益を上げるということは、これらのサービスがプロフェッショナルな仕方で提供されるということを意味しているので、プロダクト・デザインや会計士などが必要であると発表者は力説していた。発表者がこの点について提案していたのは、アウトリーチ・サービスを実現し、倫理教育や倫理コンサルテーションから収益を得るために大学内部および外部に協力者（collaborators）を育成したり確保したりすることである。最後に発表者は、エシックスセンターの役割である地域社会への貢献について語った。

次はデューク大学キーナン・エシックス研究所所長の Noah Pickus 氏の発表（“Beware of What You Wish for…for It Will Surely Be Yours”）であった。発表者は「影響力（impact）」、「売り上げ（Sale）」、「拡張性（Scalability）」という三つのテーマを掲げて話を進めた。発表者によれば、キーナン・エシックス研究所ではデューク大学はもちろんのこと、大学外の不動産、メディア、保険などに携わる企業や組織に対してもビジネス倫理の講座や教育を提供すると同時に、地域のパブリック・スクールに対しても倫理教育等を提供してきた。発表者の報告では、最終的には倫理教育や倫理コンサルテーションといったアウトリーチ・サービスを提供して欲しいという大学外部からの要望の方が多くなり、そ

の要求に応じるという形でこれらのサービスを提供する範囲を拡大していった。こうしてキーナン・エシックス研究所は大学外部の地域社会にも影響力を及ぼすことに成功するだけでなく、大学外部に提供するサービスの売り上げから研究所の運営費も確保できるようになった。しかしその一方で、大学内部の一組織であるエシックスセンターないしエシックス研究所が、このように大学外部にまで拡張したビジネスをどう運営していくべきかという問題が出てきた。さらにこの問題は、大学内のエシックスセンターやエシックス研究所は大学外の共同体とどのような関係を築くべきなのかというより大きな問題に繋がる。結局のところ、デューク大学のキーナン・エシックス研究所はこれらの問題に直面して、そのプログラムの目的と活動について見直し、それに変更を加えることになった。具体的には、効率性およびキーナン・エシックス研究所が大学外部の共同体に提供しているサービスの正当性、アウトリーチ・プログラムの維持と拡大のコスト、このプログラムが同エシックス研究所の研究指針に対して及ぼす影響を考慮に入れながら見直しを行ったらしい。発表者は最後に、エシックスセンターないしエシックス研究所がサービスを第一に提供するのはそれが属する大学であるべきなのだから、この点を忘れてはならないことを強調していた。

三番目の発表者は、ノースカロライナ大学チャペルヒル校パー・エシックスセンター長の Jan Boxill 氏であった。その発表タイトル "Staying Afloat: Collaboration is the Key" を見ても分かるように、発表者がとりわけ強調していたのは「コラボレーション」である。発表者によれば、エシックスセンターが

属する大学の教職員と学生たちだけでなく、同じ地域の他の大学や共同体と協調してエシックスセンターのプログラムを推し進めることがとりわけ重要である。なぜなら、第一に、こうした共同作業を通じて、多様な分野の人々にプログラムに参加してもらうことによって、エシックスセンターにとって有益な人材を比較的低コストで育成することができるだけでなく、エシックスセンターがさまざまな分野の学生たちの就職活動にも役立つことができるからである。第二に、このような共同作業を通じて、どのような倫理問題に関心が向けられているのか、また、どのような倫理教育プログラムが必要とされているのかを理解できることで、エシックスセンターのプログラムの形成とその優先順位を明確にすることができるからである。第三に、エシックスセンターはこの種の共同作業を通じて、センターが属する大学だけでなく、大学外部の地域社会においても確固とした地位を確立しうるからである。第一と第二の理由について発表者は、パー・エシックスセンターが提供しているプログラムはすべて学際的なものであること、プログラムに参加した多様な学生たちがさまざまな倫理問題や課題を自ら見つけ出すことでエシックスセンターのプログラムも多様化してきていること、学生たちが倫理問題や課題に取り組むことで結果的に彼らの就職が有利になっていること（たとえば、フードエシックスに取り組んだ学生は食品会社のマネージャーに抜擢されたり、薬品に関する倫理問題をあつかった学生は製薬会社に就職できたりしたこと）などについて説明した。第三の理由について言えば、発表者は地域の病院スタッフやソーシャルワーカーなどに倫理教育プログラムを提供し、エシックスセンターが地域社会に貢献するこ

とで地域社会においてもなくてはならない存在と見なされるようになり、ひいては現在のような不況下でもパー・エシックスセンターが揺るぎない地位を地域社会で保持していることに役立っていることについて触れていた。

最後の発表者は、サザンカリフォルニア大学リーヴァン人文・倫理研究所所長の Lyn Boyd-Judson 氏およびそのリサーチアソシエイトの Shlomo Shern 氏であった。彼らの発表は "Starting and Structuring an Online Ethics Center" であり、彼らの研究所が運営しているウェブ上のエシックスセンター（Ethics Resource Center）に関するものであった。もちろん、このオンライン上のエシックスセンターの利用者は主にサザンカリフォルニア大学の学生たちである。発表者たちは同大学の芸術学部と共同してウェブサイトを作成したこと、オンライン上のエシックスセンターを学生たちに利用・活用してもらうためにさまざまな試みを行っていることなどについて説明した。後者の点について発表者たちは、同大学のエシックスセンターのウェブサイト上に「エシックス・ツールボックス」を設けて、教員が自分の講義に倫理教育を盛り込むための手引きを掲載したり、倫理学に関するポッドキャストやビデオへのリンクを掲載したり、学生たちがそれぞれの分野の倫理問題の事例を学習したり質問を自由に書き込むことができるようにしたりしたことについて詳述していた。これらの点については、サザンカリフォルニア大学のエシックスセンターのウェブサイトを実際にご覧いただいた方が分かりやすいと思われるし、もちろん英語で書かれてはいるが、どのようなサービスが実際に提供されているのかは英語でも把握可能であると思われるので、そちらをご参照ねがいたい（2011 年 1 月 1 日最終アクセ

ス http://college.usc.edu/usc-levan-institute-online-ethics-center/)。

以上の四つの発表が行われた後、質疑応答と討論の時間となったが、そこでは「そもそも倫理教育なるものは可能なのか」という哲学的な問いをはじめとして、それぞれの発表について多様な議論が交わされた。印象的だったのは、質問者たちの中には大学関係者ではない一般の方々も混じっており、しかも彼らは他の参加者と同様に躊躇することなく質疑を行っていたことである。

本報告では、2010 年度 APPE 大会について、APPE プリカンファレンス・ワークショップ（PAIT）の模様およびエシックスセンター会議の内容を中心に紹介した。PAIT について言えば、参加していた各専門分野の研究者たちが試行錯誤しながら、実践倫理・職業倫理について話し合い、学際的な交流や対話を深めようと努力している姿が報告者の目に焼き付いている。エシックスセンター会議については、日本もアメリカ合衆国が直面しているものと似たような状況に置かれている現状に鑑みれば、実践倫理および職業倫理について人々の交流や学際的な対話を促進するためにエシックスセンターやそれを支援する APPE のような団体の類いが日本においても必要となるかもしれない。もっとも、本報告で見たように、アメリカ合衆国におけるエシックスセンターには課題が残されているし、国民性や文化が異なる日本にアメリカ合衆国流のエシックスセンターをそのまま導入することには何らかの問題があるかもしれない。とはいえ、本報告で紹介した APPE のエシックスセンター会議の内容、すなわちアメリカ合衆国の四つの大学におけるエシックスセンターやエシックス研究所が共有してくれたセンター運営の経験や教訓は、実践倫理・職業倫理に関する幅広

い取り組みを日本において実行する際にも役立つのではなかろうか。

付記:　本報告は、日本学術振興会科学研究費基盤(B) 20320005 による研究の一部である。

(やまもと けいいちろう　立命館大学非常勤講師)